

屋久島の「ひとと自然」に関する研究小史

湯本 貴和 (京都大学 生態学研究センター)

屋久島では 1970 年代から 1980 年初めにかけて、地元有志によって「屋久島を守る会」、「屋久島を記録する会」、「屋久島ウミガメ研究会」など「故郷の自然や文化をもっとよく知り、それを保存し活用する」ことをめざす活動が行われてきた。この時期は屋久島の自然の価値が学術的に脚光を浴びはじめた時代であった。1982 年に国会で瀬切川地域の保護と公園区域の見直しが行われ、伐採・スギ植林から保護・非破壊的利用への方向転換を島の内外に印象づけた。この歴史的事件の最中に、西部域の低地林が国立公園三種から一種に格上げされ、鹿児島県の鳥獣保護区になり、屋久島はユネスコ MAB 計画による「生物圏保護区」の指定を受けている。これらの動きに応じて、1983 年から 5 年にわたる文部省「環境科学」特別研究「屋久島生物圏保護区の動態と管理に関する研究」、1983-84 年の環境庁による「花山原生自然環境保全地域総合調査」が実施された。京都大学霊長類研究所が永田に観察センターを建設し、鹿児島大学、千葉大学、大阪市立大学、京都大学などの研究者や学生が屋久島に長期滞在して調査を行うようになったのもこの頃である。

しかし、地元で標本や資料を保管できる公的な施設がなく、専門の教育を受けた人材も乏しかったため、研究成果をわかりやすいかたちで、地元に戻元・保管することができなかった。この反省に立って、1980 年代中頃には地元と研究者をつなぐ博物館活動の必要性が強く認識されるようになってきた。1985-86 年に日本モンキーセンターは日本生命財団の助成で「屋久島における人と自然の共生をめざした博物館的手法による地域文化振興に関する実践的研究」を実施した。これは大学などの研究機関に所属する研究者が主体だったこれまでの学術調査とは異なり、地元の研究者以外の人材を多くメンバーとする特徴をもつ。1986 年と 88 年にはトヨタ財団の助成を受けた「おいわあねっか屋久島」という活動が実施された。これは植物の宝庫といわれる屋久島において人は植物とどうつきあってきたかを調査する活動で、今はもう失われようとしている自然との関わり方を島内の古老から聞き取ることに主眼が置かれていた。

1990 年代になってからは、西部域でヤクシマザルや植物の調査をしている研究者が中心となって「屋久島研究自然教育グループ」が結成され、島の人々に自分達の行っている研究をわかりやすく紹介する活動が始められた。

1992年に鹿児島県は人と自然の共生をうたった「屋久島環境文化村構想」を発表した。また、1993年には屋久島の自然がユネスコの世界自然遺産に指定された。とくに西部域は海岸線から奥岳の頂上部まで遺産地域に含まれ、動植物の垂直分布を重視した屋久島全体の生態系としての価値が国際的に認められたとあってよい。これを契機に屋久島は「地球環境時代の聖地」として1994-97年国連大学を中心とした特定領域研究「ゼロエミッション」、2001-3年鹿児島大学を中核機関とする特定領域研究「循環型社会システムの屋久島モデルの構築」などのターゲットとなって今日にいたっている。